

金沢市 経済局 商工業振興課  
宮村 厚至さん

【お子さん】令和5年1月生まれ  
【育休取得期間】120日

初めての育児は「分からない」の連続。男性の家庭進出を促すためにも、誰もが育休を取る社会に。



—育休はどれくらい取得しましたか？

子どもが1月の後半に生まれ、まず3日間の出産補助休暇をもらいました。その後育児休業に入り、5月の終わりごろまで120日間取得しました。

—育休を取ろうと思ったきっかけを教えてください。

妻の実家は新潟の雪深い地域です。真冬に里帰りするのは不便だったので、こちらで出産することに決めました。私の実家は金沢にありますが、妻にとっては義理の父母。全面的に頼るのも気を遣うだろうし、かといって妻だけで育児をするのは無理がある。自分が子育てに関わらなければと漠然と考え始めました。

とはいえ私の仕事は残業が多く、それまで通りの働き方をしていたら、育児に関われそうもない。どう乗り切ろうかと考えたときに、育休という選択肢が浮かびました。妻はもちろん賛成でしたし、実家の親も「今はそういう時代だし、父親としてしっかりやりなさい」と応援してくれました。

## 職場への育休の相談は、半年以上の時間をかけて少しずつ

—育休取得の希望は言い出しにくくなかったですか？

職場への相談は少しずつ進めていきました。希望を伝えることに多少の心理的負担があったので、まずは係長に少し話をして、その後しばらくしてから課長に相談。半年以上の時間をかけて、徐々に伝えていった形です。市役所内では年に2回、4月の終わりと10月に業務の目標を立て、評価を受けるしくみがあります。その機会も利用して相談することができました。

私が在籍している課は人数が少なく、職員一人ひとりの業務負担が重いので、みな余裕がありません。自分が抜けると課内の業務に少なからず影響を及ぼします。急激な変化を起こさないよう心掛けました。

出産予定日は月曜だったのですが、前の週までめいっぱい働きました。週末を迎えたタイミングで、上司から「もう予定日だし、来週からは休むかテレワークにしよう。出産のときにそばにいられるのはあなたしかいない」と言ってもらい、すっぱりと育休に入ることができました。

—いよいよ初めての育児。いかがでしたか？

生活スタイルはがらりと変わりましたね。子どもが生まれる前は、仕事中心で毎日が回っていて、妻が就寝した後に帰宅し、休日は疲れて寝ていることが多かったです。いざ子どもが生まれると、完全に子ども中心の生活。初めての子育ては戸惑うばかりで、誰に何を聞いたらいいのかも分かりませんでした。準備もしてきたつもりでしたが、実際に生まれてみると足りていないものが次々と判明し、買い物に抜けるタイミングを見計らうのも一苦労でした。

入浴も最初は子どもの触り方すら分からない。力の加減が難しくて、傷つけたらどうしようとびくびく

です。日々成長するので、新生児のころは沐浴させて小さいバスタオルでくるんでいたのが、あっという間に一緒にお風呂に入れるようになります。その都度手順が変わり、子どもの反応も変わるので、常に手探りでした。



(ご本人提供写真)

## 育児に計画性は大事だけれど、外れることを前提に

— 「分からない」に直面する毎日だったんですね。

もう右往左往です (笑)。退院して最初の3週間は私の実家で過ごしたのですが、赤ちゃんのために用意してもらった部屋が思いのほか寒かったんです。夫婦で住んでいたアパートは断熱性がよく冬場でも温かかったので、あの寒さは想定外でした。

おむつに関しても、準備しておいたものがぴったりと合わず、何度も服やシーツを濡らして、洗濯するは

めになりました。「一時期しか使わないから最低限でいい」と考えていましたが、何度も洗濯したり、細かいことで悩んだりするのが嫌になり、とにかくたくさん用意して、量で勝負する作戦に方向転換しました。子どもを持つ前の自分なら「おむつなんてどれでもいいでしょ」と思っていたし、こんなことで悩むとは思っていませんでした。育児グッズを親の都合で事細かに決めても、赤ちゃんが対応してくれるとは限らないんだな、と（笑）。あちらの都合に当てはまるものをいかに提供できるかが勝負。計画性は大事だけれど、詰めすぎると外れる。外れることを前提にゆるやかな計画を立てるしかない、そう学びました。

## —育休取得でデメリットを感じたことは？

しいて言えば収入面でしょうか。私は実家で暮らしていた期間が長く、多少の蓄えもあったため、収入面でのデメリットをあまり感じずに済みました。ただ、人によっては収入の減少が気になるかもしれません。育休制度を使うと、最初の半年は賃金の7割弱、それ以降の半年は5割の給付金があります。ただ1年を超えるとゼロ。例えば、大学進学や就職を機に金沢に引っ越してきて、一人暮らしをしながら働く20代同士が結婚して子どもを持つケースだと、金銭的に苦しいでしょうね。貯金も少ないでしょうし、給与もまだ低い。その低い給与で給付額が決まってしまう。そもそも家族がひとり増えると生活費は確実に上がります。家計への負担感から取得を躊躇するケースはあると思います。

## —確かにお金は子どもを育てていく上で死活問題ですもんね。ところで、育休中も何らかの形で仕事と関わっていましたか？

たまに問い合わせの連絡はもらいましたが、自分からキャッチアップはしていません。逆の立場で考えたら「育児に専念してね」のスタンスでいた方が、安心して過ごしてもらえるように思います。離れている間の仕事の状況がどうなっているか逐一知る必要はなく、復帰時に適切な引継ぎができればよいのではないのでしょうか。

その分、復職の際は初日から全力でした。助走期間や慣らし運転をやっている余裕はなかったです。年度をまたいで育休を取っていたので、周囲のみなさんはやりにくかったかもしれませんね。でも外部の方たちからしたら、私が育休復帰直後かどうかはまったく関係ありませんから。

## —今は仕事と子育てを両立されているんですね。よかったら秘訣を聞かせてください。

両立なんてできていないですよ（笑）！「秘訣はこれです！」なんて言ったら妻から何を言われるか。毎日が手探りで、秘訣があったら教えてほしいくらいです。

## 男性がもっと家庭に進出すれば、社会も変わっていくのでは

—なるほど（笑）！ではこれからの育休制度はどうあってほしいですか？

育休を取る男性はまだまだ珍しい存在です。制度は整いつつありますが、「使うか使わないかは自分の判断でご自由にどうぞ」とあくまで任意。そうではなく、「育休は必ず取らなければいけない。取得できないなら理由を提示しなさい」くらいの強制力を持たないと本当の意味で浸透させるのは難しい気がします。誰もが休みにくい職場にいたら、誰もが変化のない楽な方、つまり育休など取らない方を選ぶでしょうから。



（ご本人提供写真）

—制度はあっても風土が変わらないと意味がないですもんね。

同年代の男性たちを見ていると「死ぬほど働いて社会的に高い地位につきたい」とか「大きな仕事をした

い」と仕事だけに全身全霊をかけている人はそれほどいません。「家での時間を増やしたい」「子どもの成長が気になる」と考えている人が多いです。家事育児も「面倒だから全部妻にやってほしい」と思っている男性は少ないんじゃないかな。男性がもっと家庭に進出して、家庭内の不安がやわらげば、社会や地域にも目が向く気がします。今の状態のまま「男も女も活躍しなさい」と言われたら、男女ともにキツイですよ。

私は育休を取ってよかったです。もし家事育児をすべて妻に丸投げして、自分は素通りしていたら、夫婦間の考えに大きなギャップが生まれていたと思います。育児も仕事もそれぞれ大変な側面があるので、「自分はこんなに大変なのにどうして分かってくれないんだ」と互いに不満を募らせていたかもしれません。相手が何をやっているのか分からないと不信感が募っても無理はない。だから経験できて本当によかったです。

日本の社会はまだまだ「プライベートなことで職場に影響を及ぼすな」という空気が強い気がします。多くの方が余裕のない状態で仕事をしている。そんな中で子育てしながら働くのは難しいはず。最近では労働環境が厳しい職場を若者が志望しなくなっているとのこと。働き方に変化が求められていると思います。

取材・編集／子育て向上委員会 長谷川由香